長沼節夫さんの想い出

―飯田そして韓国・朝鮮

高柳俊男

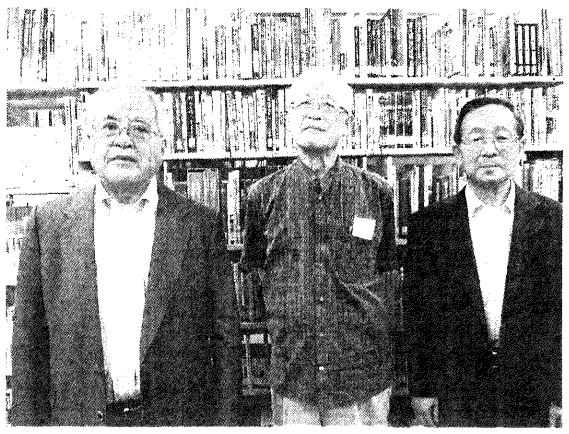
「長沼さん逝く」の報は十一月七日の早朝、在京飯田高校同窓会の知人から突然もたらされた。七月末に入院先を見舞った際、病室ではなく、面会室まで出てきてあれこれ話す余力があったので、治癒はともかく、早期の他界はにわかには信じられなかった。しかし、翌日の本紙に訃報が載ったように、それは事実だった。

法政大学国際文化学部が、飯田市を拠点に留学生の国内研修を実施すると決めたのは二〇〇九年。その研修の担当者である私が、飯田市出身の硬骨の元新聞記者であり、信州飯田ふるさと大使も務めた長沼節夫さん（一九四二年生まれ）と知り合いになるのに、そう時間はかからなかった。

忘れられないのは研修実施前年の二〇一一年六月、「飯田ふるさと大使館」も兼ねる市政会館地下の日本地域紙図書館に長沼さんを訪ね、飯田やその周辺の新聞類を見せてもらった時のことだ。飯田にまつわるあれこれや、一九六〇年代以来の長沼さんの活動を伺ううちに、「一杯やろう」となって日本酒が出て来たが、あいにくつまみが無い。すると長沼さんは、脇に置いてあったカップ味噌汁をやおら開けて中の味噌を取り出し、「これをチビチビ舐めながら飲もう」という。そんな経験は初めてだったので、妙に新鮮で痛快だった。

この出来事以来、長沼さんと一緒に仕事をする機会が増えていった。主なものを三つ挙げると、まずは宮澤芳重の顕彰運動。私は大学連携組織「学輪IIDA」に関わるなかで、かつて「飯田に大学をつくろう」と苦闘した宮澤芳重の存在が忘れ去られているのを残念に感じた。そこで手始めに、没後に放送されたNHK番組「地蔵になった男」（一九七三年）を再度観る機会を作ることとし、都立図書館がもっているフィルムで二〇一二年、上映会を実施した。長沼さんは東京分室名で「南信州新聞」に報告記事を書き、末尾を私の言葉「ぜひ飯田でも上映したい」で結んでくれた。

しかし、東京都のフィルムは都の外には持ち出せないという。私の力では暗礁に乗り上げていたら、長沼さんがこれまで培ってきた人脈と機転を活かして、映像を無事DVDで入手することに成功。法政大学では二〇一三年、このDVDによる鮮明な映像をもとに、関係者をお招きしてセミナー「いま宮澤芳重を考える」を実施した。長沼さんは、『天皇の軍隊』（朝日新聞社）を共著で出した旧知の本多勝一さんを連れて来て、一言コメントしてもらった。その後、このDVDにより飯田・下伊那での映像上映が実現したことは言うまでもない。



飯田・下伊那のふるさと大使たちとともに
（右：佐々木大使、左：矢澤大使）

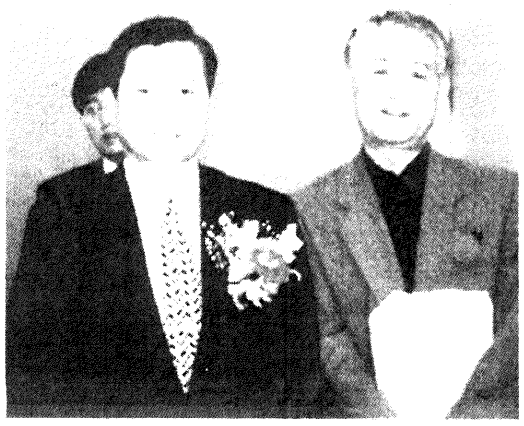
法政での会を準備する過程で、宮澤芳重がかつて暮らした根津周辺を長沼さんと一緒に訪ね歩き、宮澤をいまだ記憶する地元住民の声に耳を傾けたことも懐かしい。それについては本人が本紙に連載した「わが心の宮澤芳重」に詳しい。

第二として、翌二〇一四年の学部セミナー「飯田・下伊那の『ふるさと大使』と語るSJ国内研修」が挙げられる。研修の本実施から三年目、プレ研修から五年目を迎えたこの年、学生と教員が飯田・下伊那の三名のふるさと大使の前で研修の成果や課題を発表し、講評をいただくことで、研修の中間総括を試みた。その際、長沼さんは、阿智村の矢澤酉二大使、松川町の佐々木武彦大使とともに出席し、コメントしてくださった。三名には、郷里と都会をつなぐふるさと大使としての任務や、日常の活動についてもお話しいただいた。

そして、第三が二〇一八年、満蒙開拓平和記念館の開館五周年の時のこと。東京での公式イベントは銀座NAGANOでの開催だが、記念館関係者を慰労する場を持とうとして、日本記者クラブのレストランなど、会場候補を長沼さんと下見した。しかし、派手なお祝いは満蒙開拓平和記念館には相応しくないと思い、結局は市政会館から引越した長沼さんの事務所をお借りすることになった。狭い分、人数を限定せざるを得なかったが、料理を持ち込みケータリングを頼んで、和気あいあいと交流した。私も手作り料理を六品ほど差し入れた。

満蒙開拓平和記念館の開館５周年を祝う交流会
（奥の帽子姿が長沼さん）

想い出をこう綴ってくると、私の飯田への関わりや認識の要所要所に、長沼節夫さんが顔を出していることにあらためて気づかされる。ありがたい限りだが、実は私が「長沼節夫」という名前を初めて知ったのは、今から四〇年ほど前の学生時代にまでさかのぼる。というのは、長沼さんはのちに大統領となる金大中氏をはじめ、韓国の要人に知り合いが多く、韓国・朝鮮に関する記事を『朝日ジャーナル』『現代の眼』『エコノミスト』、そして近年の『週刊金曜日』などに多数書いているからである。同じく韓国・朝鮮を専門とする私にとって気になる存在だったが、なかでもこのジャーナリストの底力に感じ入ったのは、鶴見俊輔らの『思想の科学』一九七八年十一月号に載った、雑誌『民主朝鮮』についての七頁の紹介文である。『民主朝鮮』は戦後直後、金達寿らの在日朝鮮人によって創刊された日本語雑誌で、朝鮮戦争が勃発する時期まで三三号続いた。そこでは、日本の植民地支配から解放された在日朝鮮人たちが、これからどういう国づくりをするか、日本人の歪んだ朝鮮認識を正し、いかに日朝間に相互理解の橋を架けるかなどをめぐって、熱い議論が繰り広げられていた。『思想の科学』のこの号の特集は「雑誌にみる戦後の初心」だが、長沼さんはこの『民主朝鮮』で展開された議論の中に戦後の初心や意気込みを見て取ったわけで、着眼の鋭さが光る。『民主朝鮮』はいまでこそ復刻版が出ているが、当時は見ようと思えば国会図書館などに通うしかなかった。そうした労を惜しまず、現在・未来をよりよく見据えるために過去の貴重な営みを掬いあげる姿勢に、目先の事象のみを追う単なる報道記者とは異なる資質や視野の広さを感じたのである。



金大中氏とともに
（明石書店『祖国が棄てた人びと』より）

それはおそらく、長沼さんが不義を許さない社会派記者であると同時に、文化に対して深い関心と造詣をもち、自らもポトナム短歌会に入会して作歌活動を続けるなど、博学多彩な文化人だったことと関係していよう。今回、この追悼文を書くに際して少し調べたところによれば、雑誌『状況と主体』に「映画観てある記」を、また『日本主義』に「いま、アジアの映画が熱い！」をそれぞれ十回近く連載していて、映画にも並々ならぬ関心を寄せていたことがわかる。また、盟友の宇都宮徳馬氏が心血を注いだ『軍縮問題資料』に連載した「海外の新聞を読む」は、実に四〇回以上に及んでいる。

そういえば、長沼さんが今春詠んだ歌に、「うず高き資料の山が部屋を埋め我が『平成』は未整理に逝く」があるという。書き溜めた文章の多さの割には、本としてまとまったものがごく僅かしかないことを考えると、平成に限らず、人生そのものが未整理に終わった感が無きにしも非ずである。その無念さを晴らすべく、たとえば主だった著作をまとめて後世に残す作業を、いまからでもできないだろうか。その過程を通じて、いまは断片的にしか知られていない長沼節夫という人物の全体像が、より鮮明にみえてくるに違いない。お世話になった者の一人として、来年は志ある方たちとそんなことができたらと、年の瀬のいま心を新たにしている。

ちなみに、長沼節夫さんは本名のみならず、ペンネームとして「熊沢京次郎」「長朝夫」なども使っており、ウェブ上にはブログ「チョーさん通信」がいまも残っている。ジャーナリスト仲間を中心とした偲ぶ会が、やがて東京で開かれるとも聞く。

【法政大学国際文化学部教授】